

報告2. 森健一（元愛知大学東亜同文書院大学記念センター職員）

報告テーマ 東亜同文書院大学生の学徒出陣について

要旨

本報告は、1943年より開始された東亜同文書院大学生の学徒出陣について検討する。東亜同文書院は、1901年に中国・上海で創設され、1939年には大学へ昇格した日本の高等教育機関である。1945年、日本の敗戦により閉校するまで、第1期生から第46期生のあわせて約5,000名の卒業生を輩出した。

1943年、戦局が苛烈になるに伴い、同年10月には「教育に関する戦時非常措置」、いわゆる「学徒出陣」が閣議決定され、高等教育機関に在籍する学生の徴兵猶予が停止された。これにより、東亜同文書院大学においても第41期生から第43期生が徴兵の対象となり、同年11月には上海居留民団および上海興亜報国会合同主催の壮行会が挙行され、12月には各部隊に所属し従軍することとなった。さらに、その時に徴集されなかった第44期生から第46期生も、軍米収買や勤労働員等の軍の活動に徴集されていった。

戦地に向かう学生に対し同大学は、派遣先からの生還を呼びかけたり、江南造船所での勤労奉仕によって学生が爆撃を受け被災した際には関係各所に抗議し、動員先を変更させる対応を行なった。しかし日本の敗戦後、同大学は閉校となり、学生は国内の大学へ編入するほかならなくなった。その一方で、帰国が遅れ、編入することもできなくなった学生に対し、最後の学長である本間喜一ならびに各関係者は、同大学をはじめ、建国大学や京城帝国大学等の各大学から引き上げてきた学生の受け入れ校として、1946年11月15日に旧制愛知大学を設立した。このように、書院生にとっての学徒出陣は、戦争を体験するだけでなく、進学先を変えざるを得ないという学生生活にも影響を与えている。本報告では、当時の現地の状況をふまえて同大学の対応について触れつつ、学徒出陣による書院生の派遣先や動向について各文献からその実態や傾向を検討し、学徒出陣が書院生に与えた影響を考察することにより、外地の大学における学徒出陣の一つの事例として提示することを試みる。